

## 「自ら考え、進んで表現できる児童の育成」 ～主体的・対話的で深い学びを通じた授業の工夫と改善～

### I 研究内容

#### 1 研究内容と方法

##### (1) 研究内容

- ア 「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業研究を行う。
- イ 「主体的・対話的で深い学び」についての共通理解をするための学習会を行う。
- ウ 研究を生かして一人一実践の授業を行う。
- エ 児童の実態把握と分析を行う。
- オ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究を行う。

##### (2) 研究方法

- ア 全体研究会とブロック研究会（低・高学年）を取り入れた研究体制で研究を行なう。
- イ 研究授業に講師を招き、研究会を行う。
- ウ 一人一実践の授業公開を行う。
- エ NRT検査やQ-U、研究テーマに関わるアンケートを行い、児童の実態について把握し、具体的な指導法を研究する。
- オ 甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと連携した研究を行う。

#### 2 具体的な取り組み

##### (1) 主体的・対話的で深い学びを通じた授業づくり

- ア **主体的な学びの実現にむけて**
  - ◇導入で児童を問題場面に引き込む工夫
  - ◇効果的な見通しと振り返りの工夫
- イ **対話的な学びの実現にむけて**
  - ◇児童が話したくなる・聞きたくなる話し合い活動の場面の工夫
  - ◇友達・教師との対話・交流活動により、考えを広げたり、深めたり、考えをより妥当なものにしようとする工夫
- ウ **深い学びの実現にむけて**
  - ◇これまでの学びを生かし、広く知識を関連付けて、問題解決のためを考え、伝え合い、集団としての考えを形成する工夫

##### (2) 交流活動・ノート指導の工夫

- ア 積極的に発言し、発言を受け入れることのできる学級集団づくり
- イ 多様な考えに触れ、考えの変容を意識した、授業のポイントの工夫
- ウ 授業感想の記入を含めたノート指導

##### (3) Q-U調査の結果を分析

- ア **各学級ごとのQ-U調査の結果を分析**
  - ◇ヘルプサイン・ポジティブチェック、K-13法（簡易版）を取り入れたQ-U調査の結果の分析を実施。ブロック研究会ごとに検討会を行い、各学級の実態に応じた対応策を共通理解する。
- イ **アタックシートの作成と取り組みの成果の検証**
  - ◇各学級の実態に応じた取り組みの実践と、その後の学級の変容を検証。

#### 3 具体的実践

##### (1) 学習会

『主体的・対話的で深い学び』を通じた授業の工夫と改善のポイント」

講師：山梨県総合教育センター 主幹・指導主事 外川陽清 先生  
副主幹・指導主事 富士池慎一先生

(2) 実態調査

学習に関わるアンケート（第1回 7月，第2回 2月）

(3) 授業実践

ア 研究授業

- ・第4学年 伊藤 健 教諭 算数科「どのように変わるか調べよう」  
指導助言：峡東教育事務所 指導主事 中村弘和 先生

イ 授業公開（一人一実践）

- ・第1学年 前田 文 教諭 道徳科「はしの上のおおかみ」
- ・第2学年 金井 京子教諭 国語科「そうだんにのってください」
- ・第3学年 志村 多恵教諭 道徳科「男女で分けへだてはせずに」
- ・第5学年 高橋 理恵教諭 算数科「図形の角を調べよう」
- ・第6学年 渡邊 大智教諭 国語科「読書リブリオバトル」
- ・たんぽぽ 相川 和彦教諭 国語科「短歌・俳句に親しもう」
- ・コスモス 荻原 幸恵教諭 生活単元「ありがとうのきもちをつたえよう」
- ・教務主任 内田 俊彦教諭 社会科第五学年「自然災害と共に生きる」
- ・外国語専科 兼山茉佑子教諭 外国語「What would you like?」

## II 成果と課題

### 1 成果

- (1) 研究授業では、研究主題実現のため、児童の実態や「主体的・対話的で深い学び」をどのように授業改善に役立て、指導していけばよいのかが、わかる授業であった。子どもの実態に合わせた視聴覚機器の活用やコロナ禍でも児童が主体的に学べる児童相互に行う対話学習とノート展示会は、大変参考になった。
- (2) 理論研究・学習会では、実際の授業の様子を動画で見られたことで、「主体的・対話的で深い学び」のイメージが持てた。話を聞くだけでなく、考えの交流などもできて大変参考になった。
- (3) 一人一実践授業では、いろいろな教科の授業視実践が見られて参考になった。普段見ることがない他学年の授業実践の参観は、授業の展開、教材の工夫、児童への声かけなど、授業改善に役立った。また、児童の発達段階の違いや学級づくりの様子などを知るよい機会となった。
- (4) 学級経営の充実が「確かな学力の育成」や「豊かな心の育成」につながるので、Q-U調査結果のK-13法を用いた分析を通して、集団や個の実態、改善策を全職員が共通認識の上で指導でき、成果を上げることができた。

### 2 課題

- (1) 今年度は教科の指定がなかったので、幅広く学ぶことができた。一方で、先生方の実践の積み重ね（効果的な取り組みを次に実践する先生が意図的に授業に入れていく）がしにくかった点があった。理論研究を受けて、話し合う場面の手法や表現方法の工夫など、全体で確認してから、一人一実践へ向かえるとよかった。
- (2) 令和3年度の県学校教育指導重点の授業改善に挙げられているGIGAスクール構想のもと、ICTの効果的利用も研究していきたい。

## III 成果物

- 1 研究授業及び公開授業の指導案10点
- 2 学習に関わるアンケート結果（2回実施）
- 3 Q-U調査の結果（2回実施）

（研究主任 相川 和彦）